

『フォーラウの民衆聖書』

——ハプスブルク帝国に咲いた「谷間の百合」——

富山典彦

かつて「オーストリアの詩人」と呼ばれたこと(1)もあるアントン・ヴェルトガンス（一八八一—一九三二）は、ニーダーエスタライヒ州とシュタイヤーマルク州の州境の村メーニヒキルヒエンにしばしば滞在し、そこでいくつかの作品を書き残した。なかでも、第一次世界大戦後の人心の荒廃が、ウィーンのような大都市ならいざしらず、このような小さな村にまで波及している現状を嘆きつつ書いた六韻脚の叙事詩『キルビツシュ、あるいは駐在警察官の恥と幸せ』（二九二七）は特筆に値する。おそらくこのときヴェルトガンスは、あのゲーテの叙事詩『ヘルマンとドロテア』を意識していたことだろう。

しかしながら、この作品が山間のこの小さな村とその村人たちがモデルになっていたために、出版後、この村の住民から、自分たちを誹謗中傷するものとして訴えられてしまう。筆者が懇意にしているウィーン大学のピヒュル先生が、たまたまこのメーニヒキルヒエンに別荘を所有しておられて、春まだ浅いこの村に招いてもらったことがある。ピヒュル先生の案内で、この村に残されたヴェルトガンスの足跡を辿ったが、この村の役場に今も大事に保管されているヴェルトガンスの手紙、「キルビツシュ・スキヤンダル」への釈明のためにこの村に宛ててヴェルトガンスが書き送った手紙を、役場の職員から実際に見せてもらった。

この手紙には、もちろん、『キルビツシュ』がメーニヒキルヒエンの人々をモデルにしたものでもなければ、ましてそれを誹謗中傷するようなものではないとの弁明が切々と訴えられている。

忘れられた作家の仲間入りをしつつあるヴィルトガンスだが、メーニヒキルヒエンとの関係がこのような形で決裂したことは、その後のヴィルトガンス自身に起こる「悲劇」の序曲、いや、間奏曲として記憶にとどめておくべきことに違いない。しかし逆にまた、この「悲劇」がなければ、ヴィルトガンス自身はもちろん、ニードーエスタライヒ州とシュタイヤーマルク州の境にあるこの寒村の名も、このような形で世に出ることはなかっただろう。

「オーストリアの詩人」として賞賛されながら、やがて「ドイツ文学史」からは忘れられていったヴィルトガンスについて考察している筆者は、いずれこの叙事詩についても考察しなくてはならないと考えているが、そのヴィルトガンスは、メーニヒキルヒエンに滞在して作品を書いていたとき、疲れた体と頭を休めるために、シュタイヤーマルクを縦貫する街道から少し脇にそれた山峡にあるフォーラウ修道院を訪れていたという。メーニヒキルヒエンの村は

ずれには、皇帝レオポルト一世の時代に置かれたという国境を示す道標が今も残されている。

もつとも、ヴィルトガンスは、この修道院については何も書き残していない。ウィーン三区のヴァイスゲルバーと呼ばれる地区に生まれ、八区のヨーゼフシュタットで育ったヴィルトガンスは、もともとは「都市民」であつたが、いや、生来「都市民」であつたが故に、「田舎」に憧れた。だから、ウィーン近郊のメートリングの高台に山荘を思わせる邸宅を建ててそこに住んだ。そしてそこから、支配人としてブルク劇場に通つたのである。このメートリングの自宅のすぐ隣には、聖オットマール教会があり、ヴィルトガンスは、この教会を称える詩を書き残している。

フォーラウ修道院に足を運んだヴィルトガンスが、ここで何を考え、何を感じたか、それはわからない。日記にも手紙にも、それについての記述は見あたらないからだ。ウィーン大学のピヒュル先生と一緒だったから、案内してくれたフォーラウ修道院の修道士は、普段は公開していない部屋を見せてくれた。そこには、部屋の壁一面に、七つの大罪の寓意画が色鮮やかに描かれていた。非公開だったかこれほど見事に原色が保存されたのかと感心させられた

が、はたしてヴィルトガンスはこの壁画を見たのだろうか。もしもそれを見ていたとしたら、そのとき何を思っただろう。戦後の人心の荒廃した世界を、そこに重ね合わせたのだろうか。

ところで、ここに修道院が設立されたのは一一六三年、それは、ハプスブルク家がこの地域を支配するよりずっと以前の、バーベンベルク家の時代のことである。フォーラウ修道院建設の少し前、一一五七年に、あのフリードリヒ一世バルバロッサが初めて「神聖帝国」の名称を用いている。時代はシユタウフェン朝、われわれが「神聖ローマ帝国」と通称している国は、このときに「神聖」の名を付け加えられたことになる。

皇帝バルバロッサは、積極的に十字軍にも参加して、その途次に逝去することになるが、伝説ではもちろん、そこで死ぬのではない。ただ身を隠しただけで、帝国の危急存亡の時には再び姿を現すことになっているが、このバルバロッサは、当時オストマルク、すなわち「東の砦」を守っていたバーベンベルク家との取り引きによって、このオストマルクを世襲公領に格上げした。つまり、バーベンベルク家のハインリヒ二世はオストマルク辺境伯からオースト

リア公になったのである。それは、一一五六年九月十七日の小勅許状(Privilegium minus)によって確定される⁽⁵⁾。フォーラウ修道院は、ほぼそのような時代に建てられたということになる。

そのちょうど九十年後の一二四六年に、バーベンベルク家のフリードリヒ二世は、ハンガリー人とライタ川で戦い、その戦いで戦死し、バーベンベルク家は断絶する。この機に乗じて、二二歳のボヘミア王オタカル二世は、バーベンベルク家の四七歳のマルガレーテと結婚し、一二五一年にウィーンを占領してしまう。これとほぼ時を同じくして、一二五四年には、いわゆる大空位時代、すなわち、複数の自称皇帝が並び立つ時代が始まる。この時代は、一二七三年、ハプスブルク伯ルドルフ四世がドイツ王に選ばれ、即位することで終わる。それは同時にまた、「鷹の城」の城伯だったハプスブルク家が、帝国の歴史の表舞台に登場した記念すべき年でもある。

もちろん、当代随一の実力者であったボヘミア王オタカル二世がこれを承認するはずもない。しかしながら、オタカル二世は、自らが不遜にも「貧乏伯爵」と蔑称していたルドルフ一世に負けてしまい、バーベンベルク家の旧領を

帝国に返還する。もつとも、オタカル二世はこのことを憤懣やるかたなく思い、プラハで復権の機を狙う。そして遂に、ウィーン近郊のマルヒフェルトで両雄の決戦ということになる。一二七八年のことである。この戦いでオタカル二世は戦死し、その後、ライン川上流地域の領主であったハプスブルク家のルドルフ一世は、ここに本拠を移すことを決意し、「オーストリア家」を宣言する。

そして、一二八二年のアウクスブルクの帝国議会は、ルドルフ一世の二人の息子、アルブレヒト一世とルドルフ二世に、オーストリアとシュタイヤーマルクなどの領有を正式に承認する。しかしながら、兄弟二人の共同統治という処置が、やがてはハプスブルク家にひどい悲劇をもたらすことになる。「ハプスブルクの兄弟喧嘩」の原型が、まさにここにあった。あるいは、創世記のカインとアベルをここに投影することもできそうだ。

山深いフォールラウにひっそりと建つ修道院は、これらの歴史絵巻をどのように見ていただろうか。フォールラウ修道院は、その膨大な写本の所蔵で有名だが、ファクシミリ版が筆者の手元にある『民衆聖書』⁶が完成するのは、この歴史劇からかなり時代が下がった一四六七年のことである。

中世を相手にしていると、百年や二百年の時間は、あっという間に過ぎてしまう。この間に、「オーストリア家」を称するハプスブルク家も、いくつもの試練と苦難とを乗り越えて、ようやく、ドイツ王の地位に返り咲くことができた。一四三八年に、アルブレヒト五世がフランクフルトでドイツ王に選ばれ、ドイツ王アルブレヒト二世になったのである。

久々のハプスブルク家出身のドイツ王だが、翌年にはこのアルブレヒト二世は逝去してしまう。まだまだハプスブルク家の受難は終わらない。王の死後、跡継ぎのラディスラウスが誕生するが、その後見役だったハプスブルク家のもう一つの家系、レオポルト系のフリードリヒ五世が、一四四〇年にドイツ王に選ばれ、フリードリヒ四世となる。一方、アルブレヒト系はラディスラウスで絶えてしまう。

フリードリヒ四世は、あのフリードリヒ一世バルバロッサとは違って、勇猛果敢という言葉からはほど遠い地味な人物だったようだが、それが逆に幸いして、ハプスブルク家としては最初の、ローマ教皇による戴冠を受けた皇帝となる。ドイツ王に選ばれてから一二年後の一四五二年に、ドイツ王フリードリヒ四世は、ローマでポルトガル王女エ

レオノーレと結婚し、その直後にローマ教皇から帝冠を授けられる。こうして、長い忍苦の末、ハプスブルク家としては傍系のフリードリヒ五世は、ドイツ王フリードリヒ四世となり、遂にはローマでローマ教皇の手により戴冠した最後の皇帝フリードリヒ三世となるのである。

目立たない地味な人物ではあったが、成し遂げたことの意味は大きい。とりわけ、フリードリヒ三世の残したA.E.I.O.U.の暗号はさまざまに読み解かれるが、オーストリア家の至高性と永遠性とを謳いあげた呪文のようなものである。しかしその一方で、オーストリア家の本拠地であるウィーンをハンガリーのマーチャーシュ・コルヴェーヌスに占領されて、宮廷をヴィーナーノイシュタットに移さざるを得ない危機にも遭遇する。そのときにも、フリードリヒ三世は、ただじっと堪え続けた。堪え続けているうちに、敵が次々に死んでいったのである。フォーラウの修道院で『フォーラウの民衆聖書』が完成するのが一四六七年、ちょうどこの皇帝フリードリヒ三世の時代である。ここになにか秘密の暗合のようなものを感じてしまう。

ところで、この『フォーラウの民衆聖書』だが、「民衆の」と銘打っているものの、写本が貴重な財産であった時

代に、民衆がこの写本を手にとつて読むということはあり得ない。ただ、この聖書は、ヘブライ語でもギリシャ語でもラテン語でもなく、ドイツ語、しかもこの地方の方言で書かれているのだ。ルターが聖書のドイツ語訳をするより半世紀も前に、ドイツ語の聖書が存在していたのである。たとえドイツ語で書かれているとしても、文字の読めない民衆がこの写本を読むのではないが、まさに民衆の言葉で書かれているがゆえに、「民衆の」聖書なのであろう。

聖書の正典とは違って、「民衆の」言語で書かれた「民衆の」聖書が存在していたというのだが、例えば、『ケルトの聖書物語』のまえがきでは、「聖書物語」について次のように説明されている。

一般に聖書物語というときには、旧約聖書あるいは新約聖書全体を、聖書の記述にそつて物語として書き直したものをさす。または、聖書の一書あるいはエピソード、例えばアダムとイブの墮落の話やキリストの誕生の再話したものをさすこともある。

『フォーラウの民衆聖書』は、総ページ数四六〇と膨大

なものだが、例えば聖書の正典では福音書が四つあるのに、『フォーラウの民衆聖書』ではキリストの誕生を物語る話の一つにまとめられている。そのうえ、聖書の正典にはないエピソードまでが挿入されている。これこそまさに、「聖書物語」ということだ。

中世の写本にはつきものの挿絵は、なんと五五九枚もある。しかも、名前は知られていないが、同じ画家の手になるものである。この写本が完成してから十年後の一四七七年に、フリードリヒ三世の息子で、「最後の騎士」と呼ばれるマクシミリアン一世は、婚姻政策によりブルゴーニュとネーデルラントを手に入れる。これが有名なハプスブルク家の婚姻政策の始まりで、その後、このマクシミリアン一世の子と孫の代で、スペインとポヘミアとハンガリーを手に入れて、ハプスブルク帝国は一躍文字通り「陽の沈まない帝国」へと飛躍する。

『フォーラウの民衆聖書』が完成して間もなく、ハプスブルク帝国はこの大きな歴史の転換点を迎える。もちろん、ハプスブルク家がおよそ世界の半分を支配する大帝國になったことと、この『フォーラウの民衆聖書』との間に、何ら関係があるはずもない。しかし、ハプスブルク帝国が、

その帝国という呼称にふさわしい発展を遂げようと、産みの苦しみに身悶えていたのと時を同じくして、この山深いこの修道院で、創世記からキリストの生涯に至る壮大な歴史絵巻が、一人の無名の画家の手によって描かれていたのである。

マクシミリアン一世に始まる一連の婚姻政策は、この「最後の騎士」がブルゴーニュ家の一人娘マリーと結婚したことから始まる。ホイジンガのあの有名な「中世の秋」の世界だが、そのマリーは、ブルゴーニュ家の支配地であるフランドルの工房で作られた『時禱書』を携えてハプスブルク家の嫡子マクシミリアンと結婚した。『ブルゴーニュのマリーの時禱書』は『フォーラウの民衆聖書』よりはるかに有名なが、この時禱書の挿絵は『フォーラウの民衆聖書』のそれよりはるかに精巧に描かれている。ファクシミリ版『ブルゴーニュのマリーの時禱書』の巻末の解説によると、これらの挿絵が、フランドルの工房の誰によって描かれたものかということについても、ほぼわかっている。工房だから、当然のことながら、複数の画家の手が入っている。印象的なのは、日々の祈りのために時禱書を読むマリー自身が描かれていることである。また、いわゆる嫁入

り道具としてこの写本が描かれていたことがわかるのは、マリーの結婚相手の紋章を描き込むスペースが空いていることである。ページの外枠には、正体不明の奇妙な動植物までが、これまたきわめて精緻に描かれている。まさに写本芸術の極致と言うべきであろう。

これに比べると、『フォーラウの民衆聖書』は、はるかに素朴である。ブルゴーニュ家とハブスブルク家の「格差」とでも言うべきものを、ここに見ることができ。この時点ではまだ、ブルゴーニュ家と比べてハブスブルク家は「田舎貴族」と言うべきだからだ。しかし、その「田舎貴族」の領地の片田舎で、一人の画家が、どんな思いを込めてせっせとこの民衆聖書の膨大な挿絵を描き続けたのだろうか。

それからまた時が流れ、フォーラウの修道院をはじめとして、ハブスブルク帝国のあちこちに保管されていた「民衆聖書」の研究が開始されるのは、この帝国が崩壊する直前のことである。ハンス・フォルマーは、あちこちに残されていた「民衆聖書」を精査して、いくつかのパターンに分類した。一九一一年にフォーラウの民衆の聖書をフォルマーが手にしたときには、傷みが激しく、あちこち虫食い

だらけで、欠落も多かったようである。写本という羊皮紙に書かれたものを想像するが、この『フォーラウの民衆聖書』は紙に書かれていた。だからなおさら痛みが激しかったのである。

さて、ここで筆者が面白いと思ったのは、この山奥の修道院に保存されていた写本が一人の研究者の手で明るい世界に引き出されるのが、帝国崩壊のほんの数年前のことだったことである。写本そのものは、筆者の専門とする時代からはるかに遠い過去に属するが、その写本が山奥の修道院の書庫の中から蘇ってくるのは、ちょうど筆者の専門とする時代につながる。これもまた奇妙な暗合である。

『フォーラウの民衆聖書』が救い出されて間もなく、一九一四年に第一次世界大戦が始まる。その直接の原因は、この帝国の帝位継承者であるフランツ・フェルディナント大公夫妻が、サラエボでセルビア人青年に射殺されたことである。この事件の一ヶ月後に戦争が始まり、その戦争はたちまち世界大戦にまで拡大する。そして、その戦争のさなか、この帝国の象徴でもあったフランツ・ヨーゼフ一世が逝去し、跡を継いだカール一世とその皇后ツイタの尽力にもかかわらず、その後間もなく、帝国は崩壊する。

ハプスブルク帝国が断末魔の苦しみを受けていた間にも、『フォーラウの民衆聖書』の修復は続けられていた。その修復作業が完了するのは、ようやく一九二九年のことである。「黄金の二十年代」が終わり、ファシズムの時代へとオーストリア共和国も突入しようとしていたであろうどそのとき、『フォーラウの民衆聖書』の修復が終わるといっても、何か不思議な因縁である。その後間もなく、このオーストリア共和国も、「永遠に」地上から姿を消すことになる。

挿絵はもちろんのこと、文字の一つ一つには、それを手書きする人の魂がこもっているはずである。修道院の建設の時期にオーストリアが辺境伯領から公領に格上げされる。その修道院でこの民衆聖書が作成されていた頃、オーストリア公領を本拠地にしたハプスブルク家は世界帝国への道を歩み出す。痛みの激しかったこの民衆聖書が書庫から救い出されたとき、ハプスブルク帝国は崩壊寸前だった。そして、修復が完成したとき、ハプスブルク帝国の後継国家の一つであるオーストリア共和国も、未曾有の危機に遭遇していた。

すべては偶然、これらには何の関連もないと言いつつこ

ともできよう。しかし、気の遠くなるような歴史的時間の推移を、静かな山里に建つフォーラウ修道院とその民衆聖書とが、谷間に咲く可憐な百合の花のように、じっと見つめ続けていたことは確かである。

この「研究ノート」は二〇一〇年度成城大学教員特別研究助成「ハプスブルク帝国と辺境」によるものである。

注

(1) 拙論「アントン・ヴェルトガンスの栄光と挫折——オーストリアとドイツのはざままで」『ヨーロッパ文化研究』二一集(二〇〇二年)参照。

(2) Vgl. Wendelin Schmidt-Dengler: Das langsame Verschwinden des Anton Wildgans aus der Literaturgeschichte. In: Wendelin Schmidt-Dengler/Johann Sonnetner/Klaus Zeyringer(Hrsg.): Die einen raus——die anderen rein: Kanon und Literatur: Vorüberlegungen zu einer Literaturgeschichte Österreichs. Berlin: Erich Schmidt 1994.

(3) Vgl. Franz Hadrigar: Drama. Burgtheaterdirektion: Vom Scheitern des Idealisten Anton Wildgans. Wien: Herold 1989.

- (4) 拙論「アントン・ヴァルトガンスの『世紀末ウィーン』——*Musik der Kindheit. Ein Heimatbuch aus Wien* (1928) 45」『ローマンス文化研究』二二集(二〇〇三年) 参照。
- (5) Vgl. Hubert Hinterschweiger: *Wien im Mittelalter: Alltag und Mythen Konflikte und Katastrophen. Wien/ Graz/ Klagenfurt: Pichler 2010, S.23.*
- (6) Ferdinand Hutz: *Die Vorauer Volksbibel. Faksimile-Wiedergabe aller 51 Seiten des Buches Exodus aus dem Codex 273 der Stiftsbibliothek Vorau. Graz: Akademische Druck- u. Verlagsanstalt 1986.* Ferdinand Hutz: *Geburt und Kindheit Jesu in der Vorauer Volksbibel. Mit der Wiedergabe von zwölf Bildern in Farbe und Originalgröße aus Kodex 273 des Stiftes Vorau. Graz: Akademische Druck- u. Verlagsanstalt 1989.*
- (7) 松岡利次編訳『ケルトの聖書物語』岩波書店、一九九九年、IV頁。